

映像人材育成の国家政策

——「フェミス」映像人材育成のフランス国立専門学校——

中 川 洋 吉
清 家 彰 敏

1. 緒言

20世紀は映像の世紀といわれた。また映像は政府によってマスコミュニケーションの道具として管理、創造されてきた。さて、21世紀はこの映像がインターネットの場において個人、大衆に開放される世紀と考えられる。この開放される映像が創りあげる映像ビジネスは巨大な産業を形成する可能性がある。本研究は、この21世紀に創造される映像ビジネスの中核となる人材とその教育システムを問題とする。特に先進的モデルとしてフランスの映像教育をとりあげ、分析を行う。

フランスには、映画学校として、我が国でも良く知られたイデック(IDHEC)があり、世界各国の映画学校の中でも、多くの著名監督を輩出したことで、その知名度は高い。第1期の卒業生に、アラン・レネ、他に、クロード・ソテ(4期)、ロベール・アンリコ(7期)がおり、そして、ルイ・マルもイデック出身である。

イデック同様にフランスには、国立の演劇、音楽、美術の高等専門学校が存在する。音楽、演劇はコンセルヴァトワール、美術はボ・ザールであり、映画は、映像一般専修校としてフェミス、撮影専門学校としてルイ・ルミエールがある。

我が国で、国立の美術、音楽専門学校として東京芸大がある。しかし、国立の映画学校は存在しない。更に、国立大学の中で、映画学部を有しているところは皆無である。

フランスのフェミスは、1986年に創設された。フェミス「FEMIS」は、

”Formation et Enseignement aux Metiers de l’Image et le Son” の略である。正式名称は、「視聴覚教育と人材育成」の意である。

このフェミスに、1995、99、2000年と三回に渉り訪れ、聞き取り調査を行なった。その調査結果をベースに、フランスの映画学校（本質的には映画・映像学校）と、映像人材育成のモデルについて、考察する。

2. フランス映像人材育成の史的考察と現状

映画を文化として扱う気風が濃厚なフランスでは、第二次大戦直後に、国立映画センターを（以下CNCと略記する）を創設させ、フランス映画産業の保護・育成を目指し、今日に到っている。

イデックはそれより早く、第二次大戦中の1943年10月に、創設された。当時の映画監督であり、CGT（フランス労働総同盟）映画技術者組合委員長であったマルセル・レルピエが政府と協定を交わし、イデック「IDHEC」(Institut Des Hautes Etudes Cinematographiques) が創設された。ここから、フランス映画の逸材が巣立った。

イデック卒の学歴は、フランス映画界では「金箔付き」であり、一目置かれる存在であったが、ヌーヴェル・ヴァーグ、1968年5月革命以降は、既成の権威を否定する動きが抬頭した。イデックだけがエリートではないとする風潮が広がった。しかし、フランス映画界の要衝に張り巡らされたイデックのネットワークは、根強いものがあつた。ところが、イデック自体の映画学校としての機能は徐々に下がって行つた。相次ぐ校舎の移転、特にパリ郊外移転で、パリのもつ芸術性やプロとの交流が疎遠になり、イデックの重要性が薄れた。

そして、イデックを発展的解消し、フェミスが下記の理由で創設された。校舎は、パリ、セーヌ河畔、メトロ、イエナ駅のパレ・ドゥ・トーキョウに設置され、第一期生を受入れた。1986年という年は、フランスのメディア界にとっては重要な年であった。時の第一次ミッテラン政権のジャック・ラング文化相^(註1)の主導のもと、新テレビ局「ラ・サンク」が開局、CNCへのテレビ局

の拠出金が総売上げの5.5%と定められた。この1986年は、テレビ映像産業が、政府の指導により、映画産業へ進出した時期である。

テレビ映像産業の発展により、映画人教育も、映画の枠に留まらず、広く、オーディオ・ヴィジュアルへと目を転じる必要が出て来た。それが、映画専門の体質が濃厚だったイデックを解消し、フェミス設立の大きな動因となったのである。ジャック・ラング文化相はニュー・テクノロジーへの対応が可能な教育機関の設立を考え、学科はイデック時代の監督コース、編集コースの2学科からフェミスで、7学科へと大幅に増加され、ニュー・テクノロジー時代に備えられた。これは米国映画への抵抗であった。

教育理念は、所謂イデック流の技術重視ではなく、芸術志向へと変換し、学生には広い教養が求められるようになった。以前の専門学校の色彩を是正し、巾の広い映像人の育成が目標に掲げられた。^(註2)

フェミスは、国立映画学校であったが、イデック以来ずっと、国立高等専門学校(Ecole Nationale Supérieure)ではなかった。それが1996年12月16日、国立高等専門学校へと格上げとなった。即ち、演劇・音楽のコンセルヴァトワールや美術のボ・ザールと同列に扱われるようになったのである。

新生になったフェミスは、文化省とCNC両方の直属となった。国家が支配した映像がインターネット上で個人に解放され、映像が21世紀インターネットビジネスの中核になる。このように考えていくと、フランス政府の国家政策は、かつての映画産業の保護といった視点から米国の映像による世界戦略、世界支配に対する戦略へと移行しつつある。映像のグローバルスタンダードとしてのハリウッド映画、CNNニュースはかつては社会・文化支配であった。ところが、インターネット化によって、生活、個人の内面の支配にまで及ぼうとしているとの認識がここには存在するとも考えられる。

校舎は、現在はモンマルトルの丘の裏に位置する18区のフランカール街にある。

フェミスは、1986年、最初の校舎、パレ・ドゥ・トーキョウ、で誕生したが、

その後、パレ・ドゥ・トーキョウを一大映像センターとして改修するプロジェクトが決められた。パレ・ドゥ・トーキョウとは、メトロ、イエナ駅近くのパリ市立美術館と中庭を挟んだ、シンメトリーな建造物で、種々のエキスポジション会場として使用されて来た。それが、新プロジェクトで、CNC、シネマテック、フェミスと、映像関係を一つにまとめて収容する方針が打ち出された。

この工事のため、フェミスは一時的に、パテ撮影所^(註3)跡のフランカール街へと移転した。ところが、2000年3月まで文化相を務めたカトリーヌ・トゥロットマンが、多額の建設（改修）費用に難色を示し、パレ・ドゥ・トーキョウの新プロジェクトは立ち消えとなった。CNCは、シャイヨー宮近くのリュベック街に、シネマテックは、火災の後一時離れていた本拠地シャイヨー宮に戻り、フェミスは、1999年初めから仮住まいの筈だったフランカール街に最終的に落ち着いたのである。

パレ・ドゥ・トーキョウの映画センターの新プロジェクトの頓挫後、新たな構想が出現した。1998年6月30日にカトリーヌ・トゥロットマン文化相は、巨大スポーツ・センターのあるベルシー地区に新たなメゾン・デュ・シネマ（映画の家）の構想を発表した。ベルシー地区とは、パリ、12区のセーヌ河岸の旧ワイン倉庫跡である。真正面には、セーヌ河を挟み、新築の国立図書館が見える。この一帯、スポーツ、コンサートの殿堂ベルシー・スタジアム、公園、集合住宅、そしてUGCのシネマ・コンプレックス（18館）も開館した、パリの再開発地域である。この一隅に、旧アメリカ文化センターがある。

文化省は、経営難に陥ったこのセンターを1999年2月に1億5400万フラン（邦貨30億8000万円）で買い取り、メゾン・デュ・シネマへの転用を決定した。なお、旧アメリカ文化センターは、多面形の前衛的な建築物で1994年に2億6000万フラン（邦貨52億円）を掛けて建設された。1995年以降、財政難のためこの文化センターは閉鎖され、それを文化省が購入した。この新開発地区のアクセスのために、パリで初の無人地下鉄14号線がマドレーヌから国立図書館まで開通している。新しいメゾン・デュ・シネマは、シネマテック、映

画図書館，そしてCNCのフィルム・アーカイブとフィルムのリーガル・デポジット部門が入居する。それらの総面積は、12000M²の規模を誇っている。このメゾンの開館は2002年の予定で、現在は内装工事中である。この為の予算として1億6000万フラン（邦貨32億円）が計上された。

パレ・ドゥ・トーキョウのプロジェクトでは、フェミスも一緒になる筈であったが、パテ撮影所跡地のスタジオ利用の問題もあり、モンマルトルに留まった。1996年のシャイヨー宮の火災で、映画博物館は閉鎖、上映館を転々としたシネマテックにとり、待望の本拠地となる。又、CNCやシネマテックから離れたフォーブル・サン・タントワヌ通り（12区）にあった映画図書館も統合されることになり、利便性が増した。

建物内部は、下記のスペースから成っている。

- | | |
|---------------|-----------------------------------|
| ① 映画博物館 | 旧アンリ・ラングロア映画博物館 |
| ② 上映会場 | シネマテック用
4室（450席，200席，100席，90席） |
| ③ 図書館・メディアテック | |
| ④ ヴィデオテック | |
| ⑤ 展示スペース | |
| ⑥ 教育活動 | 青少年グループ向けの映像教育の場 |
| ⑦ 出会い・討論スペース | 一定テーマの下，情報提供，展示，討論を行なう場 |
| ⑧ 研究・セミナー | |
| ⑨ インターネット | ウェブによるメゾンへのアクセス |

所蔵されるフィルムは、シネマテック分が23000本、CNC分が60000本となり、相当数が一箇所にまとめられる。

映画図書館の方は、10500部の刊行物、400タイトルの定期刊行物、14000部の雑誌、350000葉の写真、12000枚のポスター、10000個の美術セット模型

とデッサンが収蔵される。

3. パテ撮影所のコンテンツの継承

パテとは、19世紀末に作られた映画会社であり、フェミスの校舎について語る時には欠かせない存在である。1896年にシャルルとエミール・パテがパテ兄弟社を創立、その後、1918年にパテ映画会社と名称を変更した。1929年に、当時の映画会社ナタン社と合併し、翌年には、フランカール街のスタジオに始ったばかりのトーキー時代に対応して、最新式のRCAの録音機を装備し、本格的映画スタジオとしての態勢を整えた。

このパテ・スタジオは、以後“スタジオ・フランカール”と映画人の間で呼ばれ、フランス映画史を飾る多くの名作を送り出した。

「ラ・マルセイエーズ」(38) ジャン・ルノワール監督

「ブローニュの森の貴婦人たち」(44) ロベール・ブレッソン監督

「天井桟敷の人々」(44) マルセル・カルネ監督

「夜の門」(46) マルセル・カルネ監督

「恐るべき親たち」(48) ジャン・コクトー監督

「フレンチ・カンカン」(54) ジャン・ルノワール監督

「赤と黒」(54) クロード・オータン＝ララ監督

パテは、この他に1930年から35年までに60本のトーキー作品を製作。

又、ナチス占領下でも16本の作品を製作した。

戦後は、「甘い生活」(60) (フェデリコ・フェリーニ監督)、「山猫」(63) (ルキノ・ヴィスコンティ監督)のイタリア映画の巨匠作品もこのスタジオから送り出された。

そして、最後の作品がジャン＝ジャック・アノー監督の「愛人／ラマン」(92)であった。

この作品の後、パテ撮影所は映画製作から撤退した。その施設をそっくり受け継いだのがフェミスである。

フランカールとは、1867年に作られた通りの名で、位置的には、モンマルトルの丘の中腹から麓へかけての一角である。最寄りのメトロは、ラマルク・コーランカールで、駅が作られたのは1912年と、これ又大変古い。

メトロの駅にしては非常に深く、エレベーターで屋外へ出れば、上に、モンマルトルのサクレ・クール寺院が見える。モンマルトル独特の石段が、あちこちに点在する。メトロの駅を出た後、暫く、カフェ、食料品店、本屋、肉屋等の個人商店が並ぶ通りを進む。昔ながらの街のお店屋さんが古くからのモンマルトルの佇まいを保っている。フェミスへは、この石段を降りる。降りるとすぐに、昔風のアパルトマンが目に入る。前庭が長く取ってあり、一寸、工場の入り口を思わすが、建物自体は、非常に重厚なクラシック調のアパルトマンである。

このように、スタジオ・フランカールは、街の中に溶け込んだスタジオであったことがわかる。鉄のゲート風の門には、パテのマークが昔のまま据えつけられ、壁に、一寸大き目の表札に「フェミス」と書かれている。昔日のパテの趣をそのまま残している。

ところで、パテ撮影所（パテ社）は、製作部門はレンヌ・プロダクション（クロード・ベリ監督主宰）と合併したが、興行配給部門は継続され、そして過去の多くの名作二次使用などで、依然としてフランス映画界でメジャーの地位を保っている。今回のフェミス訪問の一番の目的は、改修後のスタジオ見学であった。説明は、フェスティバル責任者のファニー・ルサージが行なった。

フェスティバルとは、字義通り、映画祭のことである。フェミスの学生は、映画・ビデオ製作を殆ど常時行っており、その制作作品を各地のフェスティバルへ出品するための部署であり、学生にアドバイスを与えたり、手伝ったりするのが仕事である。^(註4)

在学中に製作された作品が、すぐに、各地のフェスティバルに出品するシ

システムが出来上がっている。もし、フェスティヴァルで入賞でもすれば、プロデューサーの目に留まり易く、短篇を作るチャンスも出てくる。

出品するフェスティヴァルとして、フランス国内では、アンジェ、ポワチエ、クレルモン-フェラン、ベルフォールの各都市、外国では、ニューヨーク（米）、ダブリン（アイルランド）がある。

4. 「シネフォンダシオン」と教育設備

カンヌ映画祭は、短篇部門、そして、98年度から新設された「学生映画コンペ-シネフォンダシオン」への出品がある。「シネフォンダシオン」は、世界各国の映画学校の学生が製作した作品が選考され、カンヌのフェスティヴァル・パレスで上映される。日本からは、1999年は、山崎達暉監督（日大芸術学部大学院生）の「夢二人形」、今年2000年は、木村有理子監督（映画美学校学生）の「犬を撃つ」が出品された。

優秀作、三作に賞が授与される。現在までは、ヨーロッパ諸国、アメリカ勢の水準が高く、日本の二作品は入選から洩れている。

受賞作には賞金が出る。第一位が10万フラン（邦貨200万円）、二位は7万5千フラン（約150万円）、三位は5万フラン（約100万円）。更に、一位作品には、長篇劇映画を製作した場合、本選コンペ部門に自動的に選考される特典が付いている。

ここに「シネフォンダシオン」を、新たな選考源としようとするフェスティヴァル事務局の意図が読み取れる。

優秀作品の表彰式は盛大なもので、夜10時からセレモニー、それに引き続き、ディナーが催される。昨年は、パレス脇のビーチに設けられた、最大スポンサーである化粧品メーカー、ロレアル社の特設テント（1000名位収容）が会場となり、「菊次郎の夏」の北野武監督チームや、NHK・BSのカヌ映画祭番組の出演者、緒形拳が日本人として出席した。本年は、クロワゼットのホテル・カールトンに会場を移し、ピエール・ヴィオ会長、ジル・ジャコブ総代表が出

席した。学生映画コンペとしては、豪華すぎるディナーであるが、これも華やかなカンヌ映画祭に似つかわしい。

豪華と言えば、知名度の高い映画人を集めた審査員にも当てはまる。

今年の委員長は、1999年のパルム・ドール受賞作品「ロゼッタ」の監督、ダルデンヌ兄弟の一人、リュックで、委員は、フランチェスカ・コマンチーニ（伊・監督）、クレール・ドゥニ（仏・監督）、ミラ・ソルヴィーノ（米・女優）等で構成された。

この部門は、1998年から始り、毎年応募が増えている。本年は、850本であった。そして選考されたのは13本で、1本のアニメを除き、総てフィクションとなっている。応募数は、1999年が420本、1998年度が200本であり、カンヌ映画祭の知名度と相まって、年毎に、映画学生の注目を集め始めている。応募作品数の増加に伴い、上映時間も年々長くなる傾向がある。

日本には、国立映画学校がないが、他の国々にはそれが既に存在している。例えば、ニューヨーク、ドイツ、イギリス、ポーランド、デンマーク、ブラジル、ヴェトナム、フランスは、其々の公立映画学校の学生作品が出品されている。映像が20世紀の政治に大きな影響を与えた歴史の反映とも考えられる。21世紀は映像が個人の内面に大きな影響をインターネット上で与えると思われる。サイコ（心理）ビジネス（清家、1999）の中核が映像である。

さて、本選コンペ、或る視点、短篇と並び、「シネフォンダシオン」は、カンヌ映画祭本体の四番目の公式部門であり、選考はジル・ジャコブ総代表が担当している。若き才能の開拓を目的とした、この学生映画コンペには、2001年から会長に昇格するジル・ジャコブ総代表の若き才能に注目する意欲が感じられる。

この部門の煽りをまともに受けたのが、併行部門の批評家週間である。上映会場のフェスティバル・パレスを「シネフォンダシオン」に譲らざるを得なかった。メイン会場のフェスティバル・パレスから監督週間で退いて久しいが、今年からは、批評家週間で消えた。

カンヌ映画祭自体の拡大発展に伴い、併行週間がとばっちりを受け、いよいよ映画祭本体と併行部門との距離が決定的に開いた。

内部施設

スタジオ・フランカール自体は、七階建てであり、実際のスタジオスペースは、三階からとなる。ルサージュの案内で、各階毎に見て行く。まずは、小道具収蔵庫。セットで使われた小道具類が所狭しと置かれている。最早、ここは、学校ではなく、完璧に、撮影所の一隅であるとの感を強くする。次に、編集室へと移動する。八畳程度の編集室がずらりと並ぶ。丁度、チリからの留学生自身が撮ったビデオの作業中であった。彼以外に、編集担当の若いフランス人男女、三人での仕事で、皆、真剣にモニターに見入っていた。自分達の撮った映像を、じっくりと編集できる、教育施設の良さに驚いた。又、もっと驚いたことは、編集室の数である。二十数室あるとのこと。つまり、二十数組の撮影チームが同時に編集作業をすることが可能なのだ。

続いて、オーディトリウム・ルーム、機械倉庫、照明倉庫を順に見て回る。夫々の場所には、専任の職員がおり、機材の管理をしている。

驚かされたのは、カメラ機材である。ビデオ、16ミリは当然の事ながら、35ミリのアリ・フレックスのカメラがあることだった。

日本の場合、独立プロなら、一日数万円の賃料が要る機材が、学生に無料で貸し出されるのを見て、フェミスの教育環境の良さに、感心するのみであった。しかも、それらは、職員の手により、きちんと整備されている。見学の際、丁度、一台のアリ・フレックスが修理中であった。

試写室は、大中小三つある。一番大きい、サル・ジャン・ルノアール（サルはルームの意）は、大型スクリーンで、一寸した映画館も位負けするような立派さである。

次に、スタジオを覗く。一番大きなスタジオでは、かつて、ジャン・ルノアールの「ラ・マルセイエーズ」が撮られた。現在は、二分され、そのうちの一つ

に、セットが建て込まれている。美術科の学生が、片隅で図面と睨めっこをしている。

一杯のセットで、学生達はそれぞれのアイデアを基に、各自がフィクションを一本製作する。同じバックで、学生の数だけの作品が出来上がるということも興味深い。

大作、名作が作られた、旧パテのスタジオが、今、フェミスの学生達の貴重な遺産となっている。前世紀初めのスタジオは、全く古さを感じさせず、寧ろ、そのいぶし銀的な渋さを一層深めているとさえ感じられる。

スタジオ、ずらりと並んだ映画、ビデオ用の編集室、オーディトリウム・ルームがある。勿論、これ以外に教室がある。外見からは、モンマルトルの住宅街の、クラシックな石造りアパートマンの中にこれ程の設備が備わっているとは、全く想像できない。

旧パテの建物自体、現在は、パリ市の管轄にあり、フェミスは、パリ市から借りているようだ。

設備一覧

- 1 (設置数) 美術作業アトリエ
- 2 オーディトリウム・ルーム (録音室) (フィルム+ビデオ)
- 3 試写室 (170名収容, TXLドルビー, 16-35ミリ
映写設備)
(63名収容, ドルビー, 16-35ミリ映写設備)
(20名収容, 16-35ミリ映写設備)
- 4 撮影スタジオ
- 27 編集室 (16, スーパー 16, 35ミリ)
- 11 カメラ (16, スーパー 16ミリ)
- 4 カメラ (35ミリ, アリ・フレックス)
- 5 カメラ (537 ベータカムSP)

5. 運営と教育体制

フェミスには、専任の教員はおらず、外部の専門家が、夫々の教科を担当するシステムを採っている。その数は約 400 人である。現役の映画人が、講師を務める。日本の映像教育は現役の映画人の公的教育への参加がほとんどなされていない点と比較して、対照的である。映画分析の授業では、カイエ・デュ・シネマのジャン・ナルボニの名も見える。他の部門では、製作は、フランス映画界の大物プロデューサーで、ユニ・フランス・インターナショナルの会長、ダニエル・トスカン＝デュ＝プランチエも名を連ねている。他に、外部からの講師として、演出部門では、ジャン＝クロード・ブリソ、クロード・ミレー、撮影部門では、アニエス・ゴダール、ブルノ・ニュイタン。シナリオ部門では、ジャック・フィエスキ、ダニエル・トムソン等の名がある。このように、フランス映画界がサポートしている様子が、窺い知れる。

アドミニストラクション部門では、会長がアラン・オークレー。彼は CNC 副会長や民営テレビ「M6」の会長を歴任している。1995年までは、フェミス創立以来、著名な脚本家、ジャン＝クロード・キャリエールが会長職にあった。

筆頭専務格のディレクターは、ジェラルド・アロである。CNC の部長として、映画の歴史的遺産に携わって来た。その下に、事務局長のフィリップ・クタンがおり、演劇畑出身である。各部門の責任者、そして、広報を始めとする(フェスティバルも含まれる)職員や、スタジオの裏方たる、録音、美術、機材等の専門家の総数合わせて、52 名でフェミスは運営されている。

フェミスは、7 学科から成り立っている。それらは、脚本、演出、編集、撮影、録音、美術、そして製作である。7 学科以外に、スクリプトがある。この学科は、2 年に一度の募集となっている。

受験生は、各部門毎に応募する。新学期は、9 月より始まる。98 年度は、

750人の応募者があり。38名が合格している。入学定員は、年により幾分増えている。それに、2年に一度のスク립ト学科の人員も加わる。

教育年限は、次のようになっている。

- | | | |
|-------|------|--------|
| - 第1期 | 10ヶ月 | |
| - 第2期 | 17ヶ月 | |
| - 第3期 | 12ヶ月 | 計 39ヶ月 |

第1期では、全員、同じ教科の履修が義務づけられている。基礎理論、映画を見ての作品分析、そして、撮影実習が骨子となっている。撮影実習では、各人が3分間のビデオ作品でドキュメンタリーと、16ミリカメラによるフィクション撮影を行なう。殊にビデオでは、他の学科について学ぶことが主眼となっている。

第2期でも、撮影実習が重要な位置を占める。ベータカムによるドキュメンタリーのビデオ撮影、35ミリカメラによる短篇フィクションの撮影を行なう。学生は、自らの専門分野を実習する。他に、課外実習を一月半ばから2週間行なう。その間、各学科は休講となり、学生達は、マルチメディア、アニメ、SFX、コンセルヴァトワールでの演技と、学外の企業や学校で、学科とは直接関係の無い教科の研修を行なう。これも第二期の特徴である。

第3期は、各専門課程を深める期間である。例えば、演出部門は、フィルムの製作、脚本部門は、長篇を書く。そして、期末には、ディプロームが授与される。

このように、実地に重点を置いて39ヶ月の課程は終了する。

授業料は、年間365フラン、この額は、一日1フラン（邦貨20円）と、シンボルの意味で、実質的には無料に近い。総ての費用は、フェミス負担となる。実地製作のカメラの賃貸料は無料、フィルムも学校が提供と、至れり尽くせりである。卒業までに学生一人当たりには掛けた費用は、莫大な額に上る。フェミスは、絶対に留年は認めない方針をとっている。

想像力重視の入学試験

入試資格は、27歳未満で、フランス人、外国人を問わない。この点は重要である。フランス文化そのものの反映としての映像という概念は、個人の内面の形成過程の問題であり、それは国籍によるものではない、との認識である。一般的にフランスでは、バカロレア（大学入学資格）取得者は、無試験で大学に入ることが出来る。但し、グラン・ゼコールと呼ばれる高等専門学校は、バカロレアの後、2年間の準備学習（公的の予備校のようなもの）を経て、入学試験を受けることになっている。従って、グラン・ゼコールのディプローム（卒業証書）の方が、大学卒よりずっと格が上である。グラン・ゼコールのトップがポリ・テクニク（国立理工学校）、エナ（国立行政学院）、そして、エコール・ノルマル・スーペリウール（国立高等師範学校）である。所謂、御三家で、政界、官界、実業界のトップは、殆どポリ・テクニクとエナ出身者が占めている。ジャック・シラク大統領、リオネル・ジョスパン首相、女性で、ジョスパン内閣の筆頭格の閣僚、マルチヌ・オブレ雇用・連帯相等は、すべてエナ出身者である。エコール・ノルマル・スーペリウール出身者の多くは、文学者や大学教授等が多い。

フェミスの受験資格は、バカロレアに加えて、最低2年間の修学経験（大学や専門学校）が必要である。又は、撮影、録音課程に限れば、バカロレア無しで4年間の職業経験が受験資格となる。

前身のイデックの場合は、職業専門学校の色彩が強かった。フェミスの場合は、専門性に一般性も盛られている。ここが、フェミス設立の趣旨である。

フェミスは、大学とグラン・ゼコールの中間に位置した、特殊な専門学校と言える。

フランスのトップ・リーダーは、殆ど、ポリ・テクニクかエナの卒業生が独占しているが、ジャーナリズムと芸術（映画・映像を含む）は、これらのエスタブリッシュメントが未だ侵食していない、数少ない分野の一つである。そして、フェミスは、映画界のエリートを育成する、映画・映像産業界のエスタ

ブリッシュメントである。

入試日程は次のようになる。

1月～2月	登録	登録料：600フラン（邦貨12000円）
4月中旬	書類配付	
4月下旬	筆記試験	
6月上旬	学科別試験	
6月中	口頭試問	
7月末	合格発表	

入試は、筆記試験、学科別試験、口頭試問と三段階に分れて行なわれる。

第一段階は、二種類の試験がある。その内の一つが、作文と視聴覚テストである。もう一つが、映画作品分析である。

まず、最初の作文テストでは、与えられた三題のテーマから一つを選び、それについての記述である。制限は、15ページ以内。

視聴覚テストは、映像と音、どちらかの選択である。映像なら、写真、デッサン、複製絵画を用い、映画とビデオは除かれる。音は、10分以内のカセットとなっている。

1998年度のテーマは、1) 習慣、2) ルーツ、3) 転落、1999年度は、1) 庭、2) 影、3) 螺旋であり、かなり抽象的なテーマもあり、受験生の想像力が試される。

この試験の目的は、下記の四点を知ることが狙いとしている。

- 1, テーマの理解と、外部世界への開けた感性
- 2, ヒューマンなコンタクトと地球的物への探求心
- 3, 視聴覚的感性
- 4, テーマの解釈とパーソナルな発想

この試験は、各人の自宅作業による。

第二の試験、映画作品分析は、第一の試験と異なり、フェミスの校舎で行な

われる。

1999年度は、成瀬巳喜男監督の「山の音」(54)の一部が上映された。受験生はこの成瀬作品で、映像と音の構成について分析と、演出、美的観念、全体像についての記述が求められる。試験時間は、3時間。この第一段階の選抜試験を通った受験生は、第二段階へと進む。ここでは、各学科別の試験が行なわれる。そのうち、脚本と演出学科について採り上げる。

脚本学科の場合

三題のテキストから、一題を選び、シノプシスを6ページ以内で書き上げる。物語を完結させねばならない。作品は、短篇、中篇、長篇、何でも構わない。

次いで、この物語の中のワン・シーンを3ページ以内で仕上げる。美術装置、動作、状況と台詞等を受験生は想像してシーンを構成せねばならない。

次のテキストのうちから一題を選ぶ。

- 1, 建物の入口に捨てられた生まれたばかりの赤ん坊…
- 2, 6件の銀行強盗を働いた男…
- 3, お祭り用品をリースで借りる…

となっており、脚本学科の受験生は、ここでも、想像力が試される。試験時間は6時間半。

演出学科の場合

この部門は、筆記、撮影、口頭試問と三つの試験から成り立っている。

筆記試験

三題のテキストから受験生は3～6ページのシノプシスを作り上げる。この試験により、ドラマツルギー、撮影、録音、全体構成についてのレベルを調べるのが狙い。

撮影

審査員の前で、受験生は数分のシーンを撮影する。予め、台詞の入ったワンシーンのシナリオが渡される。

最低限の美術装置（テーブル一つ、椅子二脚）。男女二人の役者が用意され、受験生はカメラを操作する。フィルムは、モンタージュをしないラッシュのまま。準備に1時間、撮影に1時間。

口頭試問

筆記試験と撮影の翌日、口頭試問が行われる。そして、受験生は撮影フィルムについて、審査員の前でコメントする。口頭試問は、1時間。

最終段階の口頭試問

口頭試問は、公開の場で行われる。内容は、一般教養、個人的好み、履歴、そして、各人のプロジェクトについて質問される。この結果と、第一段階の試験結果が最終的な判定材料となる。

審査員は、現役映画人と、教員からなる7人で構成され、所用時間は約45分である。

6. 映像人材育成女性監督の進出

このように、それぞれの試験自体のボリュームが多く、しかも、半年かけての長丁場の試験で、受験生は体力やタフネスが要求される。

採る側は、三段階の試験で、受験生のオリジナリティーや想像力をじっくりと見極める。

規約上は、毎年35名入学となっているが、いつも、定員を数名オーバーしている。規約通りではなく、良い学生がいれば、多少オーバーしても採っている。

このように、難問をくぐって合格した学生達は、9月から新学期を迎える。

近年、フェミスは、女性の合格者増が顕著になっている。1998年の統計によると、女子学生の比率は、

脚本	17%
演出	47%
編集	15%

となっており、この年は女性の数が少ないが、全体的に言えば、ほぼ男女半々である。勿論、学科により、男女比のばらつきはある。

フェミス誕生以来、女性の若手監督の進出が云々されている。ここ、15年くらい、確かに女性若手監督の数は増えている。ここに、フェミス現象が現れている。ノエミ・ルヴォウスキー、「私を忘れて」(95)、パスカル・フェラン、「死者とのちょっとした取引」(94)、らのフェミス出身の有望若手監督がいる。

フェミスは、女性の学校と言われてきた。殊に、1986年の開校時から、女性優位の時代が続いた。

イデック以来、女性の監督進出は、非常に難しく、その数も限られていた。しかし、フェミスになってから、監督志望の女性達が大挙して押し掛けた。男性の聖域であり続けた演出部門を始めとし、各部門へ女性がどンドン入り、1986年は女性29人に対し、男性17人、1989年、女性23人に対し、男性13人、1990年は、女性21人に対し男性12人と、女性が多かった。この傾向は1995年まで続き、その後は、男性がやや盛り返して、現在に到っている。この傾向を反映して、第1回から4回までの中の新人監督の多くが女性であった。日本では、前述の二人の女性監督作品しか公開されず、他の女性新人監督の名は全く知られていない。

昨秋(99年秋)から今春にかけて、多くの女性新人監督の一作目、二作目がバリで封切られた。

エミール・ドゥルーズ「新しい肌」、ソルヴェイグ・アンスパッシュ「勇気を出して!」、エマニュエル・ベルコ「のみ」、エレヌ・アンジェル「人の肌、獣の心」、クリスティーヌ・キャリエール「誰が月をむしるの」、レティシア・

マッソン「売りもの」、そして前述のパルカル・フェラン、ノエミ・ルヴォウスキー等の女性である。

さて、社会は生産、販売、購買の3つの行為で成立してきた。この3つの行為のうち、20世紀は男性が生産を中心に大きな役割を占めたことが知られている。ところが21世紀、経済の中核は消費（購買）に移り、GDPの約60%以上を先進国では占める。販売と購買が消費の要素であり、この決定で男性より女性が優位であることが、過去より指摘されてきた。インターネット化により、このことはより明確になりつつある。消費（販売・購買）を楽しむという点で女性はインターネット上でのビジネス活動の中核となる可能性が高い。C to Cは女性中心のビジネスである。その中で使われる映像が、女性により創造され、活用されるのは極めて自然で合理性を持っている。

この点でもフェミスは、21世紀映像ビジネスの中核的人材育成の要件を備えているとも考えられる。

学生の気質

パスカル・フェランは、イデック最後、クリスティーヌ・キャリエール、ノエミ・ルヴォウスキー、ソルヴェイグ・アンスパッシュ等は、フェミス第一回の卒業生である。

1995年のフェミス訪問時に、学長のジャン＝クロード・キャリエールに次ぐNo.2である、クリスティーヌ・ジュペ＝ルブロン代表（当時の首相アラン・ジュベの前夫人で、夫の姓を名乗っていた）への取材の際、彼女はフェミスの学生気質について、興味ある話をした。

フェミスの学生の中には、ゴダール信奉者もあり、一つのタイプとしてヴィジョン・アンティミストの傾向があるとの事。ヴィジョン・アンティミストとは、個人的、内面的性向を現し、現実との接点が稀薄で、独善的傾向を示す場合もある。この性向に対し、ジュペ＝ルブロンは否定的な見解を持っているが、次のようにも付け加えた。

現在の多くの学生達は、現実に根差した作品を作る方向へ向かっており、自己満足だけを求める作品は少なくなっている。そして、彼らの世代の若者が直面する政治、社会へと目を向け始めている。

若い世代が、ここ数年、現実へ目をむけ始める傾向は、フェミスだけではなく、フランス映画全体についても言え、世の中の潮流に合致している。

ソルヴェイグ・アンスパッシュ

2000年の6月21日から24日まで開催された「第八回横浜映画祭」にソルヴェイグ・アンスパッシュ監督の「勇気を出して！」("Haut, les coeurs")が出品された。その際、第一回フェミス卒業生の彼女とのインタビューの機会があり、フェミスについても聞いてみた。

彼女の長篇第一回作品のストーリーは、彼女自身の闘病生活に基づいたものであった。妊娠した女性（今やフランス若手女優の中で人気、実力ともトップ・クラスとなったカリン・ヴィアール）が、乳ガンに冒されていることが判明するが、死の恐怖と闘いながら出産する。

殆どのスタッフをフェミス出身者で固めており、フェミス出身者の仲間意識の強さについての質問には、「特別に、フェミス出身者でスタッフを固めることは、最初から考えてはいませんでした。結果として、このようになったとしか言えません。私達フェミス出身者は仲が良く、徒党を組むと思われませんが、はっきり言って、それは違います。在学中は、年間、一人が四本の作品を実習で撮りますが、他人に負けたくないで、ライヴァル意識丸出しで、仲間意識どころではありませんでした。しかし、この様に言われるのは、素晴らしい映画環境に身を置く、私達へのジェラシーも混じっていたと思います。

私個人は、三度目の受験で合格しましたが、その時は、26歳でした。20歳前後の学生に混じり、より作品で勝負という気持でした。又、私はフェミスの第一回生で、はっきり数は憶えてませんが、この年は女子学生の方が多かったのです。恐らく半数以上は居たでしょう。」

この現象には、当時、校長であった、ジャン＝クロード・キャリエールも驚いていたようです。

一つには、男子に比べ、女子の方がまじめに勉強するので、試験をやれば、私達、女子の方が多くなるのでしょうか。フェミスの試験制度が、女性に有利に働いたとも言えますか。外部講師でプロデューサーでもあり、ユニ・フランス会長でもある、ダニエル・トスカン＝デュ＝プランチエは、フェミスとCNCの新人監督助成制とがなければ、やはり、女性監督は今ほど大量に世には出なかった、と語っていますが、彼の発言、認めざるを得ないでしょう。フェミスは、制度的に女性にチャンスを与えるものだと思います。

ついでに、学生の気質についても一寸お話しておきます。

「一般にフェミスの学生は、カイエ・デュ・シネマ派の演出主義に傾き、ゴダール信奉者が多いと言われています。しかし、私に言わせれば、それは違うと思います。私の周辺を見る限り、非常に様々な階層の子弟がフェミスの門をくぐっています。観念的な映画青年も当然おりますが、その対極の現実の社会を見詰めるようとする傾向の学生もおり、本当に色々な考えや感性を持つ学生達でフェミスは構成されています。その理由として、授業料が実質的に無料に近いこと、選抜試験は専門知識よりも幅広い一般教養中心であることが挙げられると思います。

授業料の負担が無ければ、貧しい階層の子弟にも門戸は開かれます。一般教養を重視すれば、映画オタクは当然入試ではじかれます。

卒業後は、大部分がテレビへ行き、映画へ行ける人は少ない傾向があります。テレビへ行くことは、お金の保証を得る意味では仕方ありませんが、自分の方向性を見失う危険があります。私の場合は、テレビでドキュメンタリーを手懸け、今回の長篇劇映画第一作に漕ぎつけました。」

卒業生の進路

卒業生の進路は、大部分が映画・映像関連へ進み、10%位が、教職等の映像

以外の職種，そして，残り10%が失業である。但し，親掛かりでいる卒業生は，潜在的な半失業者と変わらないとの事。

進路については，イデック以来，本命の長篇映画作品に就ける人はほんの僅かで，大半は，テレビへと流れていたが，その傾向は，フェミスになっても変わっていない。

将来的に見て，フェミス関がフランス映画界の中でマイナス作用をもたらす事も，想像される。例えば，フェミス関の排他性（もし，あればだが…）等は，警戒せねばならない側面であろう。この点は，注意する必要がある。

留学生に関しては，制度はあるが，一般と同じ試験を受けなければならない。フェミスになってからは，日本人留学生は未だ一人もおらず，中国人一人がアジア人として入学した。

語学の問題があり，フランス語以外を母国語とする受験生の入学は不可能に近いのが現実と言えよう。

7. 外国との交流

フェミスは，「映画・テレビ学校国際交流センター」(CILECT)と「ヨーロッパ映画・テレビ学校団体」(CEECT)の加盟校であり，この団体を交流のベースとしている。

映画・テレビ学校の国際交流の趣旨から，下記の活動をしている。前述の留学生受入れでは，毎年，3名の外国学生枠を設け，外国人留学生試験を実施している。この制度は，外務省の後援によっている。ここ十年間，外国人学生を対象とした夏季セミナーが毎年行われている。選考は，書類による。選ばれた学生には，フランス外務省からの奨学金が授与される。セミナーの内容は，映画理論，実製作，そして，フランス映画の発見と題される鑑賞講座から成っている。

39カ月のフェミスの正規コースに入るには，日本人にとり，非常に難しい。しかし，この夏季セミナーならフランス語の基礎を修得していれば，授業につ

いて行けるのではなかろうか。日本の若い映画学徒にとり、試して見る価値はありそうだ。9週間も映画漬けの毎日を送れば、フランスの映画環境と、映画のもつ文化性について理解を深めることは、可能であろう。又、現役の映画人から成る講師陣とのコンタクトは、より容易になるであろう。

受入れとは別に、フェミスの学生自身の海外研修もある。毎年、演出科（5名）の学生は、海外での作品製作を行なう。時には、撮影チーム帯同も可能である。製作科の学生も、海外製作作品のプロデュースをすることが出来る。

海外の映画学校へ、フェミス・メソッドとも言うべき、教授法やノウ・ハウの提供もある。

1999年 - 2000年の計画では次のようになっている。

レバノン・シナリオ実践講座

- ・ 撮影技術研修
- ・ 演出研修
- ・ 製作セミナー

フィリピン

- ・ シナリオ・セミナー
- ・ 演出・セミナー
- ・ 録音・セミナー

ヴェトナム

- ・ 映画分析と映画史の集中講座

アルバニア

- ・ 照明入門研修
- ・ 編集・セミナー

他に、フェミスは、海外の映画学校から、管理・監督の調査も依頼される。1999年には、レバノン、インドネシア、ブルキナ・ファッソへ調査団を派遣した。これらは、外務省の援助対象となっている。

8. フェミスの経済面

予算は、1995年の取材の時は3500万フラン（邦貨70億円）、2000年取材時は5000万フラン（邦貨100億円）とかなり増額されていた。予算の大部分は、CNC経由で文化省から交付される。フェミスには独特のシステムがあり、映像関連企業からのパートナーシップ制度がある。この制度により、関連企業からの資金拠出が行なわれる。

この制度について、2000年のカンヌ映画祭に「シネフォンドーション」開催の為、フェスティヴァル会期中パレに詰めていた、ジェラルール・アロ代表に聞いた。

「フェミスの予算は、CNCを経由し文化省から来ますが、それ以外に、映像関連業種を中心とした、独自のパートナーシップ制度があります。例えて言うならば、お菓子屋さんが、業界の発展のために、お菓子の学校に財政的援助をするのと同じなのです。」

加盟パートナーは、著作権関係協会団体として

SACEM (音楽著作権者作曲者出版者協会)

ADAMI (俳優・音楽家著作権協会)

SACD (演劇的著作権者作曲者協会)

PROCIREP (プロデューサー著作権協会)

L'ARP (監督・プロデューサー著作権協会)

企業からは、KODAK, SONY, ARRIFLEX 等が名を連ねている。

この拠出額は、1995年統計では、約600万フラン（邦貨1億2千万円）、1999年統計では、約700万フラン（邦貨1億4千万円）となっている。

9. 結論

イデックを発展的解消させ、フェミスは誕生した。学校名から、既に「映画」の文字が消えていることからわかるように、フェミスは、これからのニュー・テクノロジー時代を睨んだ、映画・映像産業への人材養成を目的としている。

イデックが職人養成を、フェミスは、映像的教養人の育成を目指している違いがある。その事は、受験資格に顕著に現れている。

フェミスの場合、高校卒業後、2年間の就学体験（主として、大学教養課程）が義務づけられている。ジュペールブロンは、「映画人の世界からの解放。監督志望の青年達が、カイエ・デュ・シネマを読む時間を減らし、実際に映画館へ足を運ぶこと。狭い世界に学校が留まることの拒否」を挙げているが、この点が、フェミスの教育方針と言えよう。言い換えるならば、単なる、テクニクに通じた人間よりも、もっと幅広い教養を身につけた教養人の育成である。

この方針に沿って、入学試験も進められる。徹底した、想像力の発掘を狙った試験であり、幅広い感性をもつ若者を選ぼうとする、確固たる姿勢が感じられる。

経済的には、受験料（登録料）が600フラン（邦貨1万2千円）と年間365フラン（邦貨7300円）と、学生の負担は皆無に近い。一寸古いが、1995年統計では、学生一人当りに掛かる費用は29万フラン（邦貨580万円）であり、学校として留年は絶対に認めない方針はよく理解出来る。

フランスの国家自身のもつ強烈な文化優先意識が、フェミスといった合目的映像人材育成機関を産官の協力で、作りあげたと考えられる。フランスは欧州における文化的中核であることは疑いない。米国のハリウッド映画産業の文化侵略に抗しうる唯一の欧州における存在と考えられる。ところが、このようなフランスにおいても映画産業のハリウッド支配は進み、シェア70%を米国にとられている。日本映画も同様である。

21世紀は映像の個人化が進展する世紀であると考えられる。この中で米国の映像コンテンツの圧倒的優位の中で、世界の映画ビジネスは米国に支配される

可能性がある。映像ビジネスの米国によるスタンダード支配である。フランス政府のフェミスの中核とする試みは映像のグローバルスタンダード支配への戦略と考えられる。

注・参考文献

- 注1) 2000年3月のジョスバン内閣の改造人事で彼は、教育相に任命され、再び閣僚に返り咲いた。
- 注2) 映画学校「フェミス」も、既に校名に映画の字句は消え、映画とテレビ・映像の産業人育成を所期の目的とするようになった。
- 注3) ゴーモンと並ぶ戦前からのフランス映画のメジャー
- 注4) その部署がら、インタビュー中も、ひっきりなしに学生が来て、
「ファニー、これはどうしよう」
「それなら、もう送ったから」
「ファニー、あのフェスティヴァルに出したいのだけれど」
「もう作品出来たの」 等の会話を交わしている。

聞き取り調査

- クリスティーヌ・ジュベールブロン (フェミス・代表 - 1995)
フィリップ・クタン (フェミス・事務局長 - 1999)
ジェラルド・アロ (フェミス・代表 - 2000)
アイシャ・ケルウビ (フェミス・広報責任者 - 2000)
ファニー・ルサージュ (フェミス・フェスティヴァル責任者 - 2000)

参考文献

- 中川洋吉 (1995) 『カンヌ映画祭』講談社
中川洋吉 (1999) 『カルチュラタンの夢・フランス映画70年代』ワイズ出版
清家彰敏 (1999) 『パワーイノベーション』新評論
"A propos de la Femis" (1995) クリスティーヌ・ジュベールブロン
"La Femis, rapport general" (1995, 1997, 2000)
"Panaramique ? Journal de la Femis (No 1 ? No 5) (1997-1998)
"Rapport de Cinefondation" (2000)